

[海外研究・教育活動]

パラリンピックの舞台裏
～修理サービス～

新潟医療福祉大学 義肢装具自立支援学科 准教授 月 城 慶 一

障害者スポーツにおいては、競技中または競技の前後に、福祉用具の迅速な調節や修理を必要とすることがあります。またはそういった事態に至らなくても、競技者にとっては、安心のためにサポートが身近にあってほしいものです。そういった舞台裏の修理サービスのスタッフとして私は18日間北京に行ってきました。このサービスは義肢装具の世界的なパーツメーカーであるオッターボック（本社はドイツ）が、1988年ソウルパラリンピック以来、国際パラリンピックのパートナーとして、夏と冬のパラリンピックにおいて行ってきたものです。修理スタッフ構成は、86名の国際色豊かな技術者と50名の地元中国の技術者でした。スタッフの大半は、義肢装具製作会社の社長や従業員、学校の先生達で、みな普段は職業として義肢装具や車いすに携わっているプロ集団です。このスタッフの資質はリペアサービスの運営にあたって、設備と並ぶ最も重要な点です。なぜなら、すべての修理を非常に限られた時間で行うためには、経験に裏打ちされた的確な判断力と、短時間で結果を出す技術力と、選手や他のスタッフたちとのコミュニケーション能力が必要とされるからです。

修理を希望する選手は、朝8時から夜中の11時まで、いつでも修理工場に來ていいことになっています。まずは簡単な受付を済ますと、手の空いている技術者が受付に呼ばれて、選手と修理内容について相談します。修理工場に訪れた選手を国別に分けると、一番多かった国は、中国で、ブラジル、オーストラリア、アメリカそしてイランがそれに続きました。最も多かった修理は、

義肢では

1. 部品交換
2. ソケット適合調節
3. 接合部分の修理

装具では

1. ベルトや内張りの修理
2. 膝継ぎ手の修理・交換
3. 足継ぎ手の修理・交換

車椅子・その他では

1. タイヤの空圧調節
2. タイヤ交換
3. 軸周りの修理

でした。そして開催期間中の修理件数の合計は今回も2000件を超えました。



このリペアサービスは、パラリンピック開催の目的のもう一つの側面である開催国の経済・文化・技術の活性化に大いに寄与しました。日本の若い義肢装具士にも近い将来このような国際的な場で大いに活躍してほしいと願います。